

ベガスの恋に勝つルール (What Happens in Vegas)

2008(平成20)年7月9日鑑賞(東宝試写室)

★★★



監督=トム・ヴォーン/出演=キャメロン・ディアス/アシュトン・カッチャー/ロブ・コ
ードリー/レイク・ベル/トリート・ウィリアムズ/デニス・ミラー/クイーン・ラティフ
ァ/デニス・ファリナ (20世紀フォックス映画配給/2008年アメリカ映画/99分)

……ラスベガスはカジノのまち。そんなラスベガスとロマンティック・コメ
ディが融合し、近時快進撃のキャメロン・ディアスが挑戦すればこんな映画
に！ 判決によって6カ月の新婚生活を余儀なくされた、性格正反対な2人
の前途は多難。しかし、ケンカの中でこそ真実が見えてくることも……？
300万ドルのゲットも大事だが、それよりもっと大切な「何か」が発見でき
るのでは……？

ロマンティック・コメディとラスベガスが融合すれば？

ラスベガスといえばカジノ、カジノといえばラスベガス。したがって、ラスベガス
を舞台とした映画は数多いが、そこにカジノがついて回るのは当然。ラスベガスを舞
台とした最近の話題作は、『オーシャンズ13』(07年)と『ラスベガスをぶっつぶせ』
(08年)だが、もちろんこれもカジノをテーマとした面白い映画。しかして、ロマン
ティック・コメディとラスベガスが融合すればどうなるの……？

そんなところに目をつけた(?)トム・ヴォーン監督は、「彼女」の25セント硬貨
を、「彼」がスロットマシンに入れたところ、300万ドルをゲット！ さて、その300
万ドルの帰属は……？ という面白い設定をひねり出し(?),ここにロマンティッ
ク・コメディとラスベガスが融合することに。その結果、従来のラスベガス=カジノ
映画とは全く異質の、夢のようなロマンティック・コメディが誕生することになった。

キャメロン・ディアスがロマンティック・コメディに挑戦！

ラブコメの女王は圧倒的にメグ・ライアンだったが、最近あまりスクリーン上でお

目にかかれぬのは残念。他方、近時快進撃を続けているのがキャメロン・ディアス。

私が彼女を最初に観た『バニラ・スカイ』（01年）はストーリー的にイマイチだった（『シネマルーム1』27頁参照）が、その後『ギャング・オブ・ニューヨーク』（01年）（『シネマルーム2』49頁参照）と『チャーリーズ・エンジェル フルスロットル』（03年）（『シネマルーム3』27頁参照）で全く違う魅力的な姿を見せてくれた。したがって、私の採点は星5つと星4つ。さらに、ロマンティック・コメディ風（？）の『イン・ハー・シューズ』（05年）（『シネマルーム9』124頁参照）と『ホリデイ』（06年）（『シネマルーム13』14頁参照）は、彼女の持ち味をたっぷり出した魅力的な作品だったため星5つ。そんな快進撃が続くキャメロン・ディアスが、今回はじめて本格的なロマンティック・コメディに挑戦！

ウォール街で働くバリバリのキャリアウーマンであるジョイ・マクナリー（キャメロン・ディアス）が、フィアンセの誕生日のためにある仕掛けをしたにもかかわらず、何とその日に振られてしまったところから物語がスタートする。そして、ヤケになったジョイが友人のティッパー（レイク・ベル）と共に向かったのはラスベガス。その結果、What Happens in Vegas……？これが、この映画の原題。

ジャックはなぜラスベガスへ？

ロマンティック・コメディは、男と女が両極端なキャラであることが多いが、この映画もそう。計画魔で何ゴトも完璧主義者のジョイに対して、父親の経営する会社でへまばかりやらかしているお気楽者のジャック・フラー（アシュトン・カッチャー）は、遂に父親からクビの宣告を……。しかし、そんなことにくじけるジャックではなく、友人で弁護士でもあるスティーヴ・“ヘイター”・ヘーダー（ロブ・コードリー）と共に、「こんな時こそ気分転換！」とラスベガスへ！

ジョイとティッパーのコンビとジャックとスティーヴのコンビが意気投合したのは、ホテル側が部屋をダブルブッキングしたというチョンボのおかげ。つまり、相手のミスにつけ込むのがうまいジョイは、ちゃっかりスイートルームに部屋を変更させたうえ、強い立場にあるときはえらく強くなるジャックは、カジノの招待券をゲットするという成果をあげたから。そんな2人がバカ飲み、ヤケ飲みしたのは当然。その結果、翌朝ジョイが目覚めると、何とそこはジャックのベッドの中。そのうえ、2人は法的に婚姻手続が終了していたというからビックリ……。

300万ドルは誰のもの？

もちろん、こんな婚姻は無効。だって、ジャックもジョイも心神喪失状態で(?)婚姻届にサインしたにすぎないのだから。そのうえ、ジャックにはスティーヴという弁護士がついているのだから、その手続は簡単。そう思った2人は、朝からケンカをくり返しながら手続に臨もうとしたが、行きがかり上ジョイの25セント硬貨をジャックがスロットマシンに入れたところ、何とそれが300万ドル(3億円)のバカ当たり! しかし、そんな場合、この300万ドルは誰のもの……?

ジョイは自分の25セント硬貨だと主張し、ジャックは自分がコインを入れたんだと主張したが、さてどちらが正当……? その判断は難しいが、それ以前に2人が夫婦だとすれば、それは当然夫婦の共有財産では……? しかし、そんな結論にジャックもジョイも納得できるわけはなく、婚姻の無効・取消と300万ドルの帰属をめぐる、性格正反対の2人が法的に争うことになったから、さあ大変。

こんな裁判あり? こんな判決あり?

『シネマから学ぶ法律』シリーズの出版企画を狙っている私としては、この映画で結婚(婚姻)の無効を新郎・新婦(?)双方が訴えた事件で、裁判所がどんな審理をし、どんな判決を下すのかは大いに興味があるところ。

アメリカの法廷では裁判官がやたら威張っている(きちんとした訴訟指揮をしている?)姿が目につくが、この映画に登場するワッパー判事(デニス・ミラー)もそう。婚姻の無効を求める若い2人と年配のワッパー判事との間に世代間ギャップがあるのは当然だが、飲み明かした勢いで結婚してしまったというバカげた事実をまともに受けとめられないのが、真面目一辺倒な生活をしている(?)裁判官の感覚。したがって、こんな無軌道でふしだらな2人に対して、ワッパー判事が下した「お仕置き」ともいえる判決は、2人にとって血も涙もない無慈悲なもの。

すなわちそれは、第1に婚姻の無効は認められないとし、第2に6カ月間、結婚生活を送ることを命令し、第3にその間1週間に1度精神科医トウィッチェル(クイーン・ラティファ)のカウンセリングを受けることを義務づけ、第4に300万ドルは6カ月間凍結する、というものだった。こんな感情にまかせた(?)裁判や判決って、ホントにあり……?

6カ月は長いぞ！

互いに反発しあう男女が6カ月間も同居生活を続けることがホントにできるの……？ しかし、300万ドルをゲットするためには、何としてもやらなければ。特に何ゴトにも前向きなジョイは「やってやろうじゃないの！」と意欲満々だが、きっとどちらかが音をあげるのでは……？ まずは、幸せな新婚生活ぶりを報告すべく、トゥイッチェルの元を訪れた2人だったが、2人のたわいもないお芝居はプロフェッショナルのトゥイッチェルには全く通用せず、すべてお見通しだったようだ。ご兩人、いくら300万ドルのためとはいえ、イヤな男、イヤな女との同居生活6カ月は長いぞ！

シリアスな人間観察も……

ロマンティック・コメディだと言って、バカにしてはダメ。なぜなら、ロマンティック・コメディだってそこにシリアスな人間観察が含まれていなければ、単なるドタバタ劇になってしまうから。ロマンティック・コメディのラストはハッピーエンドが約束ゴト。そして、この映画の場合は、性格正反対の男女というところがミソ。つまり、正反対だから反発しあうものの、一度理解し合えば最もよく補いあえる関係になるわけだ。

ジョイが計画魔となり、完璧主義者になったのは、自分を正直に見せる相手がいなかったため。しかし、ことごとくケンカ相手となるジャックに対して、ジョイは自分の本性そのままを見せ、ぶつけていたのでは……？ 他方、プレッシャーに弱く、負けが見えると逃げ出し、挑戦しないジャックも、なぜかジョイに対してだけはトコトン闘っていたのでは……？ すると、ひょっとしてそんな2人の相性は抜群……？ 映画後半、精神科医トゥイッチェルが示すそんな鑑定意見の正当性にビックリ！

ちょうどいい時間

最近の映画は2時間を超すものが多い。よほどの大作なら別だが、単純なストーリーの邦画でも「2時間使うのは当然」と錯覚しているのではないかと思うほど、2時間前後のものが多くなっている。しかし、そういう映画は概して展開がスローで、間延びしている傾向が……。

それに対して、この映画は最初から展開がスピーディーだから気持ちがいい。また、ロマンティック・コメディの王道をちゃんと踏まえたうえで、正統派のキャメロン・ディアスの魅力と、ハチャメチャに酔っぱらい羽目を外すキュートなキャメロン・ディアスの魅力の両方を見せながら、上映時間は99分とちょうどいい時間。半年間の新婚生活バトルの中、どちらがより頑張るか、そしてどちらが300万ドルをゲットするかがストーリー構成上の焦点だが、実はそれはお客を欺くための仮の焦点……？ つまり、このロマンティック・コメディのホントの焦点は、性格が正反対ながら実は相性抜群の2人が、ケンカと別れをくり返しながらか、最後は結ばれてハッピーエンドとなるまでの過程にある。

そんな楽しいロマンティック・コメディを、うまく99分間にまとめたトム・ヴォーン監督の手腕に拍手！

2008(平成20)年7月11日記

ミニコラム

役員も高給なら、女優の出演料も

米国の証券大手リーマン・ブラザーズの経営破綻には全世界がビックリ。米国発の金融危機はウォール街の心臓部まで深く大きな傷を与えていたわけだ。そこで注目を集めたのが、リチャード・ファルド最高経営責任者(CEO)への多額の報酬(00年以降で推計約480億円)と解雇された2人の取締役への約19億円の退職金支給計画。これでは最大70兆円(国民1人あたり約23万円)の公的資金の投入に国民感情が納得できないのは当然だ。

他方、華やかなハリウッド女優の出演料は？ 日本では10億円の興行収入で大ヒットだが、米国ではベストテンに出演料10億円以上の女優がズラリ。

リーマンの役員以上に汗水流して働いている(?)のだから文句はないが、それに伴う製作費の高騰が心配だ。

『ベガスの恋に勝つルール』のキャメロン・ディアスはその常連で、02～04年までは2位(約20億円)、その後も7位、5位、3位(約15億円)と大健闘。さらに、彼女のソフトバンクの携帯電話のCMの出演料は約3億円だからすごい。

映画ファンの私としては、米国の映画製作会社がリーマンと同じように経営破綻しないことを願っているが、どこかで出演料の高騰にメスを入れる必要があるのでは？

2008(平成20)年10月23日記